ラヴィング

むぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラヴィング

【Ｎコード】
Ｎ７１５４Ｘ

【作者名】
むぎ

【あらすじ】
過去の罪滅ぼしのため、神官になろうと神学校に通うレオン・マグダラス。ルームメイトであり親友のジーク・フォンフィリアと張り合いのある毎日を送っていた。
ある雨の日、レオンは中庭の物音に気付き、倒れていた少女を匿う。少女・アイネは言葉が通じず、現代では誰も使えない黒い呪文を操った。直後、大司教がレオンの部屋を訪ね、アイネを連れ去ろうとする。
大司教の手から逃れ、神学校から逃亡した三人は、いつしか、アイ

ネを巡る計画に巻き込まれていく……。

※２００８年頃書いたものです。手元では完結しています。

※ｐｉｘｉｖに掲載予定、自サイトに掲載済みです。

1

偉大なる創造主カタリナ　汝の慈悲深い愛で、我等を守り給え
我等を悲しみから救い給え　我等の栄えはいつも　汝と共にあらんことを

1

雨が降っている。窓硝子にゆっくりと水滴の線が走る。窓の外には庭がある。濃い緑の葉をつけた木々があり、白い薔薇が咲いている。薔薇は、園丁のおじいさんが丁寧に世話をしているのをここからよく見かけていた。

窓硝子に、黒い髪と白い肌と薄い青色の目が映っている。前髪が目にかかって邪魔なので、そろそろ切りに行きたい。

耳を澄ますと、弱い雨だれの音と、衣擦れの音しか聞こえない。日曜礼拝の後の、安息日の弛緩した空気を幸せというのかもしれないと、最近思うようになった。

足音が聞こえてくる。俺はこの部屋に一つしかない扉を振り返る。扉を開けて現れた赤毛の青年は、トレイにカップとソーサー、ポット、ミルクポットと砂糖瓶を乗せていた。茶色い目が、俺を見て笑った。

「またセンチメンタル？」

「別に、そういう訳じゃない」

赤毛の青年、ジーク・フォンフィリアはトレイの上の一式を、窓際に近い俺の机の上へ置いた。

十八歳で全寮制の神学校に入学して四年がたつが、一年前、ジークは一人部屋生活を満喫していた俺の部屋の半分を奪い取った。そんな部屋を半分奪い取った憎いやつは、なぜか今は俺の親友になっている。向こうがどう思っているか知らないが、少なくとも俺はジ

ークを気に入っている。
ジークは自分の椅子を引いてきて、俺の机の上で紅茶を注いでいた。いい香りが湯気と共に広がる。
「今日はケーキもらえなかった。残念」
ジークは心底残念そうな顔で言った。
「太るぞ。毎週食べてたら」
「でもケーキのないお茶会なんて、お茶会じゃない」
ジークの手元には既にミルクティーができあがっていた。授業のない日曜日は、紅茶を飲みながらぼんやりするのが、この部屋の習慣になっていた。俺も砂糖を入れないミルクティーを作って、一口飲む。湯気が立ち上っているのを見ていると、妙に落ち着く。
「何見てんの？」
ジークが俺の目をのぞきこんでくる。
「いや、平和だなと思って」
「嵐の前の静けさってやつだろ。そろそろきな臭い話が聞こえてくるよ」
ジークは窓の外を見た。隣国との休戦協定の期限が迫っているからだろう。隣国は小さなこの国を自国の領土に加えようと、五十年程前から侵略戦争を繰り返している。休戦協定が結ばれて、今年で丁度十年だ。休戦になった理由は分からないが、そろそろ戦争が始まるのは確実だ。世間に疎いこの場所にいても、開戦が近付いている気配は何となく分かった。
「まあ数ヵ月後の心配より、一週間先の心配をしないとな」
ジークは俺の机の上の教科書を勝手に開く。そうなのだった。定期考査一週間前なのだ。一気に気分が重くなる。
「俺は実技で点稼ぐから、いい」
教科書から目をそらす。
「そんなこと言って、どうせちゃんと勉強するんだろ。というか、実技でカバーできる程実技の比重ないぞ」
厳しいつっこみが入る。確かに実技の比重はそんなに高くない。

一応、勉強も嫌々ながらするつもりだ。神学校に入った目的を忘れる訳にはいかない。
「実技って今回、何？」
ジークは教科書を見ながら言う。
「生徒同士のサドンデス」
ジークは遠くを見るように茶色い目を細めた。
「ああ。レオン勝ちそうだな」
実技は魔法のみを使用した生徒同士のトーナメント戦だ。と、さっき廊下で会った司祭に聞いた。武器は使えないし、肉弾戦も駄目だが、魔法でなら何をしてもいいらしい。武器を作り出してもいい。もっとも、現代でそんなことができる人間は一人もいないけれど。神官レベルなら基本属性の攻撃呪文が扱える程度だ。つまり、体さばきと攻撃呪文での勝負になる。
勝つ自信はある。なぜか俺は現代人の中では魔術師レベルの魔法センスがあるらしい。魔術師協会から勧誘が来たこともあったが、断った。俺がなりたいのは魔術師ではなく神官なのだ。
「まあ実技はレオンにまかせておいて、と」
教科書に目を落としたままのジークの横顔を見る。耳に琥珀色の小さなピアスが見えた。

目の前には俺と同じくらいの体格の男が立っている。間合いは約三メートル。クラスメイトだが、名前は忘れた。というか覚える気がないので覚えていない。茶髪で、割とクラスの中心的存在だったような気がする。気がするが、俺の情報は我ながら当てにならないので、実は違うかもしれない。
俺達を囲むように、クラスメイトと司祭が立っている。その間には玉虫色の半透明の壁がある。魔法が暴発した際に備えた防御壁だ。
小雨が振り出していた。運動場は屋根がなく、ただの広場なので大雨になったら面倒だ。男が口を開く。
「お前と戦えて嬉しいよ。前回は決勝まで進めなかったから」

俺は曖昧に返事をした。前回のことなど覚えていない。数秒後に始まる勝負へ向けて、右手を握って、開く。
「始め」
司祭の声がはっきりと響いた。男も俺も動かない。
『透の空中　風　塵』
俺は古代語の呪文を紡ぐ。男は動いたが、呪文の方が速い。
『以って我が手に巻き起これ　アリス』
男の足元に向けて撃った。力の流れが右手に集まって、抜けていく感覚が分かる。撃ってから、今日は地面が濡れているから、あまり目くらましの効果がなかったことに気付く。
『透の空気　雷　塵』
男は顔をかばいながら言う。やはり雨だから、そう来るのが賢いだろう。男の手の向いた方から横に跳ぶ。
『以って我が手に逆れ　ワプラ』
『透の水面　水　気　以って我が手に溢れ出せ　オスタ』
感電の嫌な音に、防御壁の向こうのクラスメイト達がざわめく。男は顔をかばいながら、逃げた俺の方をしっかり狙っていた。呪文が間に合わなくて相殺できていなかったら危なかった。早口の練習はしておくものだ。名前は分からないが、中々強い。
「早口だな」
「練習したからな」
男は笑った。
「実技で一番っていうのは伊達じゃないんだな」
「それはどうも」
『透の空中　風　塵』
男は、不敵なという表現がぴったりの笑みを浮かべながら、呪文を口にする。避けるか、受けるか。
『以って我が手に巻き起これ　アリス』
男は手を自分の真下に向けて撃った。風の力で男の体が上へ浮かぶ。俺は目を細める。

『透の空気　雷　塵』
頭上から男の声がする。まずい。俺は口を開く。
『透の空中　飛　空　風』
『以って我が手に迸れ　ワプラ』
『以って我が身に舞い降りれ　スイル』
体が宙に浮く。男の手の先から逃げる。俺が元いた地面へ、雷の塊が落ちた。
『透の空気　雷　塵』
俺は宙に浮いたまま、口を開く。男は目を見開いて、落ちていくままに俺を見上げる。
『以って我が手に迸れ』
俺は不敵に笑った。
『ワプラ』
地面へ向けて、雷の呪文を撃った。男の痛々しい悲鳴が上がる。直撃させなかったのは俺なりの優しさだ。きっと濡れた地面が電気をよく通してくれたことだろう。男は地面に膝をつく。
「そこまで」
司祭の声が響く。男は防御壁の向こうの司祭を見る。
「先生、まだ終わっていません」
「膝をついたら負けだと言っただろう。試験でそんなに重体になられても困る」
男は何か言いたそうに司祭を見ていたが、浮いている俺を見上げた。「分かりました」
俺は地面に降りた。飛んでいるのはかなり疲れるのだ。クラスメイトから、拍手が起こった。「またレオンが一番か。つまんないな」
「でも飛べるんだから当然な気がするけど」スイル（飛行呪文）が使えるのは俺のささやかな自慢だ。努力の賜物だと是非、賞賛してほしい。
俺と男は防御壁の外に出る。男の足取りはおぼつかないが、命にはまったく別状はなさそうだ。

「それでは、今回の優勝者はレオン・マグダラスとする」
周りのクラスメイトから拍手が起こる。遠くにジークの姿を見つける。「やっぱりな」笑いながら、ジークの口はそう言った。

全身に軽い疲労感を感じながら部屋に戻ると、ジークはいなかった。そういえば選択授業があるのだった。今さっきの実技について感想やら意見を聞きたかったのに残念だ。
いつの間にか、雨が窓を激しく叩いている。景色は雨ににじんで見えない。俺は窓際の勉強机に向かった。机の上に積まれっぱなしの教科書の地層を発掘して、目当ての本を開く。
窓の外が光った。重い物が落ちる鈍い音がして、窓に目を向ける。雷だろうか。けれど、変な音が、した。俺は窓を叩く雨の隙間から、外をのぞく。いつもの木と、薔薇以外に何か見える。部屋を出て、玄関で傘を取って庭へ向かう。
雨の匂いの中に土の香りが濃くなってくる。俺は足を止めた。
白薔薇の花壇の中、舗装された石畳の上に、人が倒れていた。銀色のおかっぱ頭に、白い肌、奇妙な赤い模様が入った白い法衣、側に落ちた白い帽子。目は、閉じている。雨が白い肌を絶え間なく叩いている。近付こうとして、脚が震えているのに気付いた。傘に入る距離まで近付いて、人の側にしゃがみこむ。平坦な胸がゆっくり上下しているのを見て、体の力が半分抜けた。生きてはいる。ここまで来てしまったからには、放っておく訳にはいかないだろう。傘を肩にかけて、恐ろしく顔立ちの可愛い少年の脚と背を抱えて持ち上げた。とても軽かった。
廊下に水滴を落としながら部屋まで来たが、そのままベッドに寝かせる訳にはいかないことに気付く。少年を床に降ろして、自分のパジャマを持ってくる。サイズが絶対に合わないが、仕方ないだろう。自分の法衣に似た、模様の入った白い服を脱がしていく。
首筋が熱くなった。胸元の隠しボタンを外していた手が止まる。
少年は、胸のふくらみを白い布でぐるぐる巻きにした、女の子だ

った。

「で、自分のベッドに寝かせた、と」

話を聞き終わったジークが言う。窓の外は暗くなり始めているが、雨はやむ気配がない。女の子は二段ベッドの下の段で眠ったままだ。

「役得だったな」

ジークは薄笑いを浮かべる。体が熱くなる。

「仕方ないだろ。びしょ濡れのまま寝かせればよかったっていうのか？」

「冗談だって」

ジークは笑った。

顔を見た時点で、女の子だと気付くべきだったのだ。でも、どちらにしろ着替えさせなければいけなかったと気付いて、変なジレンマに陥った。

「このまま目が覚めなかったら、どこで寝るの？」

「床で寝るからいい」

ジークはたいして興味がなさそうに「ふうん」と言った。

「行き倒れかなあ。でも敷地内で、しかも女の子だしなあ」

確かに疑問はたくさんある。けれど、本人が目を覚まさないことには何も分からない。ここは女人禁制だから、あまり長くかくまっておく訳にもいかないし、俺とジークの精神衛生上もよろしくないし、何より俺はずっと床で寝るのは嫌だ。

ジークは椅子から立って、女の子をのぞきこむ。

「あ、起きた」

俺は椅子から立ち上がる。女の子は驚く程の機敏さで上体を起こした。開いた目は、宝石のエメラルドに似ていた。パジャマはやっぱりぶかぶかで、俺は白い胸元から目をそらす。

「起きぬけに悪いんだけど、色々聞いてもいいかな」

ジークが言う。エメラルドの瞳が驚いたようにジークを見上げる。

「ジーク・フォンフィリア。こっちはレオン・マグダラス」

ジークは俺を指差す。エメラルドの瞳がはっきりと困惑する。
「君の名前は？」
『ここは、どこなの？』
女の子ははっきりと言った。ジークがこちらを見る。俺は女の子を見る。
「どこから来たの？」
ジークはもう一度尋ねる。女の子はジークを睨む。睨んでいる。確かに。
『言葉が分からない』
ジークは俺の方を向いて眉を寄せる。
「まいったな。隣国のスパイか？　でもこんな女の子がなあ」
ジークは自分で言って、自分で可能性を否定する。とりあえず、この女の子が外国人なのは間違いないようだ。
女の子は俺達から視線を外さず、ベッドから出てきた。気のせいかもしれないが、かすかな敵意を感じる。女の子は俺達を見ながら、部屋の中をゆっくり歩く。
「何か、誘拐犯と間違われてる？」
ジークが言った。
「そうかもしれない」
「まいったな」
ジークは頭をかく。
「分かった。少し落ち着こう。紅茶もらってくる」
ジークは言葉をはさむ隙も与えず、扉を開けて部屋を出ていく。女の子が、扉へ向かって走る。
「駄目だ、君は」
慌てて女の子の手首をつかむ。見開いたエメラルドの瞳と目が合う。エメラルドの瞳が、細くなる。
『ワプラ』
女の子の手首をつかんだ手に痛みが走り、声を上げた。女の子は扉を背にして、俺へ手の平を向けていた。

細められたエメラルドの目が、こちらを見ている。野生動物のようだと思った。動いたら殺される。けれどその瞳を、とても美しいと思ってしまった。ライオンに殺される直前のシマウマは、この神々しさを感じて死んでいくのだろうか？

女の子が扉を振り返ると、扉が勢いよく開いた。女の子は痛そうな音と共に倒れて、悲鳴を上げた。

「ああ、ごめん」

ジークは何事もなかったかのように、トレイを窓際の俺の机へ置いた。紅茶の香りで体の力が抜けて、膝をついた。全身に汗をかいていたことに気付く。女の子は涙目になりながら、俺と同じ体勢でこちらを睨んでいる。痛みを感じて手を見ると、赤く腫れていた。

「ほら、お茶にするぞ」

ジークは早速、ティーカップに紅茶を注いでいる。俺は立ち上がって、自分の椅子に体を預ける。

『透の地　回　時　気　以って御身に降り積もれ　ノゼリオ』

俺は自分の手に呪文をかけた。白い光が手を包む。痛みが少し引く。

「何でそんなに疲れてんの？」

ジークはミルクティーをかき混ぜている。

「ちょっと殺されそうになった」

「脱がしたのがばれたから？」

「違う」

思わず大声で叫んでしまった。ジークは笑う。

「ほら、君の分もあるから、おいでよ」

ジークは扉の側に立っている女の子に声をかける。女の子はこちらを睨んでいる。ジークは紅茶をさしながら「紅茶、紅茶」と言い続ける。女の子はまったくこちらに来る気配がない。さっきは野生のライオンに見えたが、今は懐かない野良猫のようだ。

ジークは紅茶のカップを持って、女の子に近付いていく。女の子の体が緊張したのが分かる。「はい」ジークは紅茶の入ったカップ

を差し出した。「飲みなよ。あったまるから」女の子はジークから目をそらさず睨んだまま、カップを受け取ろうともしない。ジークは小さくうなって、女の子に差し出した紅茶を一口飲んだ。
「ほら、何にも入ってないから」
女の子の前に、飲んだ紅茶のカップをつきつける。つわものだと思った。俺には真似できない。女の子は目線をジークから外さずに、渋々といった様子でカップを受け取った。ジークは満足そうに笑って、俺の元へ戻ってくる。
「おいでよ。立ってると疲れるだろ」
ジークは女の子に手招きした。言葉が通じないというのは、もうこの際どうでもいいのだろうか。女の子はカップを持ちながら、ゆっくりこちらへやって来た。ジークの粘り勝ちだ。諦めなければ叶うこともあるのだと、何だか納得してしまった。
「そういえば椅子がなかった。レオンの膝の上、じゃ駄目だよな」
「馬鹿か」
ジークは小さな踏み台を持ってきて、自分の椅子を女の子にゆずった。俺は少し冷めたストレートティーを飲んで、深く息をついた。女の子が紅茶を舌で舐める。毒見しているのかもしれないが、猫のようだ。「さて」ジークは紅茶を俺の机の上に置いた。
ジークは自分を指差して、「ジーク」と言った。次に俺を指差して「レオン」。女の子を指差す。「君は？」女の子は紅茶のカップを両手で包んで膝の上へ置く。あまり乗り気ではなさそうだが、さっきより敵意は薄れている。
『アイネ・リルン』
「アイネ・リルン？」
復唱したジークに、女の子は頷く。言葉の壁は越えられるものなのかと、感心してしまった。口の中で女の子の名前を呟くと、先程のシマウマ体験がフラッシュバックした。
「そういえば、何かやられた」
「何が？」

ジークは首をかしげる。
「お前が紅茶取りに行く時に、アイネが一緒に出ていこうとして引き止めたら、何か魔法？　を撃たれたような気がした」
「何の呪文？」
「詠唱してなかったみたいだから、分からない」
ジークが重々しい顔をして口を開く。
「詠唱破棄ってことか？」
俺は頷いた。詠唱破棄は呪文の名前だけで呪文を発動させる技術で、高度な魔法センスと高い魔力が必要だ。現代人で習得しているのは、世界で指折りの魔術師だけだ。
「外国の魔術師なのか？」
ジークは俺とアイネを見る。当然、答えはない。
アイネの目が俺の机に向く。アイネは机の上に広げっぱなしになっている教科書を見ている。
『ワプラ、ギジュオ、ラルベルク。呪文表？』
「ワプラ、ギジュオ、ラルベルク。読めるのか？」
ジークと一緒に教科書をのぞきこむ。古代語で、現代呪文から古代呪文までが書いてある。
「古代語は読める、と。まあ魔法が使えるんなら当たり前か」
俺はアイネを見た。俺の中に生まれた可能性について聞いてみる。
「ラルベルク、できる？」
『ラルベルク？』
アイネは首をかしげて、可愛らしい声で言う。「ラルベルク」俺は教科書の呪文表を指して、もう一度言う。アイネは迷うように目を伏せる。やはり違うのだろうか。アイネは膝の上に置いていたカップを、机の上に置いた。
『黒の空』
聞き慣れない古代語が耳に入ってくる。アイネは水をすくうように、両手を胸の前に出す。
『星　宙　塵　光　年月裂きて道筋露わに』

アイネの手の中が黒い光を帯びてくる。鼓動が速くなる。
『以って頭へ降り注げ』
アイネは手を頭上へ掲げる。まるで、夜空に星をまくように。
『ラルベルク』
部屋の天井いっぱいに、黒い星空が広がる。息を飲んだ。ジークを見ると、同じように天井を見上げて、目を見開いている。
果たして、答えは出たのだろうか？　ラルベルク（天体呪文／星）は古代呪文だ。現代人で使える者は、誰もいない。
アイネが頭上で手を振ると、天井の夜空は消える。俺はジークと顔を見合わせる。
ノックの音がして、心臓が跳び上がった。「隠れて」ジークがアイネを洗面所に押しこむ。俺は扉を開けて、心の中で舌打ちした。今日は妙な客が多い。
白い正装の法衣を着た、白い長い髭の、白髪の男性が立っていた。
「どうされましたか、大司教」
この周辺一帯の教区を管理する責任者が、目の前に立っている。普段は式典などにしか姿を現さないのに。大司教はしわの中の目を細める。
「人を探していてな。どうやら少女がこの敷地内に紛れ込んでしまったようだ。心当たりがあったら教えてほしい」
確実にアイネのことだ。俺は答えていた。
「特には」
大司教は俺から視線を外す。
「誰かいたのかな。カップが三つあるようだが」
大司教は薄く笑う。カップまでは気が回らなかった。鋭いじいさんだ。さすが大司教という位についているだけのことはある。
「クラスメイトと勉強していて、先程帰りました」
大司教は長い顎鬚をしごく。
「そうか。それならちょっと中を調べさせてもらえないか。知らないうちに潜んでいるかもしれないからな」

大司教が部屋の中に踏みこもうとする。ジークが扉の隙間を塞ぐように立つ。
「明日にしていただけませんか。ほら、雨も降ってますし」
意味が分からないが、気持ちは分かる。体で大司教の進入を阻んでいると、洗面所の扉が開く音がした。
振り返ると、ぶかぶかのパジャマ姿のアイネが立っていた。
「観念したか」
大司教が呟く。ジークは顔に手をあてる。
「さあ、来てもらおう」
大司教がアイネに近付く。アイネは大司教に手の平を向けた。冷たいエメラルドの瞳が大司教を見ている。大司教の足が止まる。大司教の手が、アイネに向けられる。
『透の空気　火　塵』
大司教が小さく呟いたのが聞こえた。アイネの指先が動く。
『アリス』
巻き起こった突風に顔を覆う。何かがはためく音や、落ちる音がする。「詠唱破棄か」大司教が苦々しく言ったのが聞こえる。
『ニーロ』
大司教の悲鳴が聞こえる。風がやんで目を開くと、白い服と肌を焦がした大司教が倒れていた。アイネは倒れた大司教の上に手をかざしている。エメラルドの瞳は、細い。
『黒の空　星　宙　塵　光　年月裂きて道筋露わに』
アイネの手のまわりに、黒いもやが現れる。黒い呪文など、現代には存在しないのだ。
『以て頭に降り注げ』
「駄目だ」
飛び出していた。見開かれたエメラルドの瞳が見えた。
アイネをかくまったのは、あそこで彼女を引き渡してしまったら、真実を知る機会が永遠に失われると思ったからだ。もっとも、アイネはおとなしく引き渡される気など、さらさらなかったようだけれ

ど。

俺は呪文の終わりを聞かず、体の千切れる痛みで、意識を落とした。

2

2

雨の音が聞こえた。目を開けると、天井のランプが眩しかった。寝ているんだから、消しておいてくれればいいのに。目を閉じると、まぶたの裏が暗くなった。目を開けると、アイネの顔が、あった。

体が固まった。アイネは怒っているのか困っているのかよく分からない顔をして、俺の視界からいなくなった。足を動かしたら、何とも言えない激痛が走って、変な声を出してしまった。アイネが視界に入ってくる。やっぱり怒っているのか何なのかよく分からない表情をしている。アイネは俺の体の上に手をかざす。

『ノゼリオ』

白い温かい光が体に染みこむ。体がとても痛くて、回復呪文をかけられているということは、アイネの呪文に直撃したのだろう。死ななかったことにびっくりだ。聞きたいことはたくさんあるのだが、アイネに聞くととても大変そうだ。

「ジークは？」

アイネは横に目を向ける。

『寝てる』

俺は体ごと横に向く。ジークは椅子に座ったまま寝ていた。アイネを見ると、そういえばパジャマ姿ではなく、模様の入った法衣姿に戻っている。

「ここは、どこ？」

「ここ」と、下を指差して聞いてみた。もし通じたとしても、アイネから俺に伝えるのは無理なのではないかと、聞いてから気付いた。アイネは困った顔で、下を指差して首をかしげる。

『場所のこと？』

らちがあかない。諦めよう。その代わり、思い出した質問をしよ

う。
「アイネ。トゥーシャ？」
アイネの顔から困った色が消える。目が伏せられる。アイネは、頷いた。俺の中で、ようやく点と点が繋がった。
その昔、創造主カタリナは世界を創り、植物を創り、動物を創り、人を創った。その人こそ、古代人のトゥーシャという種族だった。トゥーシャは現代人より魔力が高く、そこで魔法が生み出された。今も魔法が古代語なのは、トゥーシャが作ったからだ。
現代人は魔法が使える人の方が珍しい。職業も優遇されるので、大抵は神官か、魔術師か、軍人になる。けれど現代人はトゥーシャの作り出した魔法の半分も使えない。文献の解析が進んでいないというのもあるが、大部分は魔力が低いということが原因のようだ。なので俺が古代呪文を口にしても、発動しない。アイネのように黒い呪文を使うことはできないのだ。
けれど、トゥーシャは数万年前に絶滅しているはずだった。
そこで、アイネがなぜ庭で倒れていたかを聞きたいのだが、このままではいつまでたっても聞き出せそうにない。
ジークの目が開いた。茶色の目と、目が合う。
「ああ、おはよう。レオン」
ジークは椅子から立ち上がって伸びをした。
「具合は？」
ジークは俺をのぞきこむ。
「体が痛い。でもさっきアイネが呪文をかけてくれた」
「お、仲良しだね。こっちはお前を運んだからもう筋肉痛だよ」
「大司教は？　というかあの後どうなった？」
ジークは椅子をベッドの側まで持ってくる。アイネも側にある椅子に座る。
「大司教はお前がかばったおかげで大丈夫だった。一応、呪文をかけてきたから死にはしないと思うよ」
不安になってきた。大司教を殺してしまったとなれば、後々大変

なことになりそうだ。
「アイネの呪文が強すぎて、何回もかけないと駄目だったんだよ。それだけでくたくたなのに、今度は重体のお前を抱えて逃げなきゃいけないときた」
ジークはため息をつく。申し訳ないので、後で何かおごろうと思った。
「ということは当然、ここは寮の外だよな？」
「そうだな。寮の近くの本屋の二階だな」
「宿屋じゃなく？　しかも近くないか」
「宿屋じゃすぐばれそうだろ。お前が重かったから遠くまで行くのは無理だったんだよ」
もっともなので、反論できない。
「本屋って、あの本屋？　いつも来てる？」
ジークは頷く。寮の側には、学生御用達の本屋があるのだ。
「まあそんな訳で、早めにここを出たい」
ジークは言う。確かに、本屋のおじいさんを巻きこむ訳にはいかない。
「どれくらい寝てた？」
俺は尋ねた。
「丸一日だな。まあ死ななかっただけでもたいしたもんだよ。明け方には出るぞ」
言い終わってから、ジークはこめかみを指で叩く。
「というか、これからどうするんだ？　アイネをかくまい続けるのか？」
アイネはジークを見る。名前に反応したのだろう。
「アイネはトゥーシャらしい」
ジークは眉をひそめる。
「生き残りってことか？」
「生き残りだったら大変だな。違うと思うけど」
「じゃあ古代から来たっていうのか？」

正直、そこがよく分からない。黙っていると、ジークはこめかみに手をあてる。琥珀色のピアスが目に入った。
「そんなことができるのか？」
独り言のようだ。
「トゥーシャだっていうのは疑わないんだな」
俺は言った。ジークは迷うように目を泳がせる。
「そう考えるしか、ないだろ？」
先程見た、天井の星空を思い出す。
「そうだな。とりあえず、翻訳機を買いに行きたい」
「翻訳機ね。分かった。もう動けるんだな？　まあ動けなくても明け方には出るけど」
体を起こそうとして、背中に激痛が走って、また変な声を上げてしまった。体がベッドに沈んだ。アイネが立ち上がって、俺の左胸に手をあてた。
『透の地　回　時　気　以って御身に降り積もれ　ノゼリオ』
アイネの手がぼんやりと光る。左胸から、温かい流れが体に入ってくる。光が収まると、体のだるさがほとんどなくなっていた。体を起こす。ほぼ痛くない。俺はアイネを見た。アイネはやっぱり複雑な表情で、俺と目を合わせなかった。
腹の音が鳴った。俺ではない。ジークでもない。アイネの顔が赤く染まっていく。ジークは笑い出した。
「そうだよな。呪文かけっぱなしだったもんな。感謝しろよレオン。何か食べ物買ってくるよ」
ジークは部屋から出て行った。
気まずい雰囲気の中で、改めて部屋の中を見回してみると、ベッドが一つしかなった。ジークはまあいいとして、アイネを床で寝かせてしまったのは申し訳ない。アイネはまだ顔をそむけている。頬は赤い。
「怒って、る？」
アイネがこちらを向く。怒っているかどうかをどう尋ねれば伝わ

るのか、分からなくて困った。
「ええと、床で寝かせて、ごめん」
俺は床を指差す。アイネが俺を見ている。駄目だ。絶対に伝わっていない。
『ラルベルク』
アイネが口を開く。さっきからずっと同じ、複雑な表情をしている。
『どうして受けたの？』
アイネはもう一度『ラルベルク』と言って、俺に手を向けて首をかしげる。もしかして俺を殺したいのだろうかと思ってしまう程、意味が分からない。
「怒ってる？」
俺は腰に手をあてて、頬をふくらますジェスチャーをした。駄目だ、二十二歳の男がやっていいことではなかった。すぐに恥ずかしさで死にそうになった。
「今のは忘れてくれ」
アイネは困惑した顔で眉をひそめる。俺がかけていた毛布を引ったくって、丸めて床に置いた。椅子から立ち上がって、丸めた毛布に手の平を向ける。アイネは自分を指して、『ラルベルク』と言って、丸めた毛布を指差す。俺を指差して、毛布にかざした手の平の下に、俺を指した指を通す。
『どうして？』
アイネは首をかしげる。もしかして、丸めた毛布は大司教だろうか。訳すと、「どうしてかばったの？」か？　さて、俺はどうやって答えを伝えればいいのだろう。
部屋の扉が開いた。「ただいま」ジークは抱えていた紙袋をベッドへ下ろした。この部屋には机がない。アイネは扉に向けていた手を下ろした。というか、いつの間に手を向けたのだろう。気が付かなかった。この警戒心の強さは異常だと思うが、アイネにとっては当たり前なのだろうか。

ジークは紙袋の中からアイネにサンドイッチを渡した。アイネは受け取ったが、受け取ったままジークを見ている。
「あ、毒見しないと駄目なんだっけ」
ジークはアイネの手ごとサンドイッチをつかんで、端をかじった。口を動かしながら、俺にサンドイッチを渡す。アイネはジークを見ている。倒れたりしないか確認しているのだろうか。俺はサンドイッチをかじる。
「アイネに、何で大司教をかばったんだって聞かれた」
「言葉通じたの？　やるじゃん。そんなの、好きだからに決まってるよな」
ジークの言っている意味がよく分からなかった。ジークは自分の分のサンドイッチをほおばっている。
「何が？」
「だから、好きな女の子に人殺しになってほしくなかったからだろって言ってるの」
否定の言葉を叫びかけて、やめた。本人の前で思い切り否定するのもどうかと思ったからだが、そういえば言葉が通じないので関係ないということに気付いた。アイネを見ると、サンドイッチの端をかじっていた。
「早いな。好きになるの。まあ好きになるのはいいことだよ」
「勝手に話を進めるな」
ジークは笑った。
「まんざらでもなさそうだな。とりあえず行き先は隣町でいいよな？　翻訳機があるかは分からないけど」
俺は頷いた。アイネはサンドイッチを食べ終わっていた。エメラルドの目が紙袋を見ている。俺は紙袋を引き寄せて、中から出したサンドイッチをアイネに差し出した。アイネは受け取って、頬を赤くして、言った。
『ありがとう』

街は人で溢れていた。神学校のあった街は割と静かなところだったので、隣町がこんなに栄えているとは知らなかった。
「まずは服かなあ」
ジークが言った。確かに神学校の白い法衣と、奇妙な模様が入ったアイネの白い法衣は街行く人々から注目を浴びている。というか、婦人達が珍しい物を見る目でこちらを見ている。このまま逃亡生活を続けるなら、目立たない服は必要だろう。とりあえず手近にあった服屋に入ることにした。
「何がいいかな。俺は魔術師って感じでもないしな。レオンは魔術師な」
「金はあるのか？」
「色々な手段を使って集めるだけ集めてきたから大丈夫」
色々な手段とやらについては聞かない方がいいだろう。アイネが側で立ち尽くしている。
「選んでいいよ。好きなの」
俺は大量にかかっている服を指しながら言った。通じたのか、アイネは店の奥へ歩いていった。
「ご試着もできますので、お気軽にお申しつけ下さいね」
綺麗な女性の店員がアイネに言った。言葉が分からないのだから、一人にしない方がいいのだろうか。ジークが服を持って俺の側を通りすぎていく。
「アイネ、これ着てよ」
ジークが笑顔で差し出したのは、布面積が少ない、うっすら透ける布がたくさんついた服だった。宝石もたくさん縫いつけられている。多分、酒場などが職場の踊り子の服だろう。
「そちらは新作でして、露出は高いんですが、この布を巻いていただくことによって、ちょっと肌を出すのに抵抗があるなという方にも割と着ていただきやすくなっております」
肌を出すのに抵抗がある踊り子って、矛盾していないか？　アイネはジークに手の平を向けた。その目はとても、とっても冷たかっ

た。
「いや、ごめん。冗談です」
ジークは退散していった。アイネは手を下ろして、服を見始めた。店員がアイネに色々な説明をしているが、アイネは完全に無視している。分からないのだから当たり前だ。それでもまったく態度を変えず笑顔で説明を続けている店員は、プロだ。
アイネは服を持ってこちらに来る。俺の前で服を体にあてて、首をかしげる。
『着てもいい？』
訳すと「似合う？」だろうか。よく分からないので、店員に試着をお願いした。アイネは店員に連れられて試着室へ消えていく。アイネを観察していたので、自分の服をまったく選んでいない。逃亡中なのだから、あまり目立たない方がいいだろう。そうなると、やはり黒だろうか。何となく服を見ていると、アイネが戻ってきた。
クリーム色の立襟のブラウスに、よく分からない白い何かを重ねている。形はコルセットに似ているが、コルセットは下着だ。下は薄い布が何枚も重なった白いロングスカートだった。
「とってもお似合いです。このビスチェはジャガード織で薔薇の模様が入っていて、とても凝ったお作りなんですよ。スタイルもよく見えますし」
店員の熱心な説明を聞いて、ブラウスの上に重ねているのはビスチェというものだと分かった。そういえばアイネの体型が完全に女の子に戻っている。布を外したのだろうか。最初からこの格好でいてくれれば、絶対に間違えなかったのに。
アイネは服を着たまま、硝子ケースの前に歩いていった。見ると、少しだけアクセサリーが置いてある。アイネがケースの中身を指差す。店員がケースの中から金色の髪留めを出す。アイネのパターンをつかんだ接客に、心の中で拍手を送った。アイネは手早くおかっぱの髪の毛を後ろでまとめて、金色の髪留めで留めた。「お似合いです」店員を完全に無視して、アイネは帽子が置いてある場所へ行

く。浅い円柱型の白い帽子をかぶって、俺の方へ戻ってくる。
『これで』
よく分からないが、アイネはもう動く気配がないので、決まったということだろうか。ジークが服を持ってやってくる。
「お、可愛いじゃん。レオン選んであげたの？」
「いや、アイネが自分で」
「お似合いです。お客様」
「俺決まったけど、決まった？」
店員を華麗に無視し、ジークは言った。決まっていないのは俺だけだ。
「黒にしようかと思って迷ってた」
「白にしろよ。アイネとお揃いで」
お揃いにする意味が分からない。
「あとお前髪の毛黒いから、黒だと全身真っ黒になるぞ」
全身真っ黒は思うところがあったので、おとなしく白にすることにした。これもジークの策略なのか。結局、ジークは黒、俺は白のシンプルな法衣にした。神学校の法衣と比べて、少し魔術師寄りになったのでいいだろう。三人並ぶと、魔術師の令嬢とそれを守る護衛のようだが、実際、一番強いのは令嬢だ。
俺達は盛大にお金を払って店を出た。店員が店の前で頭を下げて見送ってくれた。
「アイネは何で追われてるんだ？」
さっき服を何となく見ていた時に気付いた。ジークは空を見上げる。今日は雨上がりで雲一つない。
「トゥーシャだから？」
やはりそうなのだろうか。少なくとも大司教はアイネがトゥーシャだと知っていたような気がする。詠唱破棄に驚かなかったからだ。
「翻訳機探すか」
俺は言って、アイネを見た。アイネは俺達の知らない答えを知っているはずだ。

まずは百貨店から調べてみることにした。剣、杖、鎧などが置いてある階のおじさんに、ジークが聞く。
「翻訳機はありますか？」「女性用？　男性用？」「女性用」「受信発信両用？」ジークは頷く。おじさんはカウンターの奥に消えていく。翻訳機が性別で分かれているとは知らなかった。おじさんは赤い宝石のはまったイヤリングを二つ持って戻ってくる。ジークがアイネの方へ向いて耳を指す。「つけて」アイネはイヤリングを耳につける。鼓動が速くなる。
「言葉分かる？」
ジークは言う。アイネは眉をひそめて首をかしげる。
「何か喋ってみて」
ジークは口の前で手の平を突き出す。アイネは首をかしげる。
『何か、喋ればいいの？』
完全に翻訳できていない。体の力が抜けた。
「おじさん、これ不良品？」
ジークは不機嫌そうな顔でおじさんにつっかかる。
「そういう訳ではなくて、言葉が違いすぎるから訳せてないんだと思いますよ。訳したいならもっと強力なやつじゃないと」
「この店で一番強いやつは？」
ジークは言う。おじさんはアイネの耳元を指差す。「それですね」ジークは肩を落とす。
「百貨店にないってことは、専門店に行くしかないのか？」
独り言のようだ。翻訳機の専門店なんてあるのだろうか。
「翻訳機の専門店なんてあるんですか」
俺は聞いてみた。
「少なくともこの街にはありません」
おじさんは淡々と言った。「他の街にはあるかもしれません」今のはおじさんなりのフォローなのだろうか。
「まあ翻訳機は宝石の質がすべてなので、市販のもので訳せないな

ら、宝石店で加工してもらうしかないでしょうね」
「行くか、宝石店」
ジークが言った。アイネはおじさんにイヤリングを返した。
硝子ケースの中に眩しく輝く宝石がたくさん並んでいる。カウンターに女性が座っていた。長い黒髪がゆるくカールしている。
「何かお探しかしら」
女性は微笑む。宝石店の店員というよりは、酒場で歌っていそうだ。二十代後半くらいだろうか。
「翻訳機に一番向いてるやつはどれですか？」
ジークは言う。
「翻訳機？　ああ、魔力が強い石のこと？　ちょっとお待ちなさいな」
女性はカウンターの奥に消えていく。硝子ケースの中の宝石には値段がついていない。時価なのだろうか。女性が戻ってくる。黒い別珍のトレイの上に、赤い宝石が乗っている。
「これが今店にある中で一番魔力が強い宝石よ。触ってみる？」
女性は白い手袋をした手で、手袋を差し出す。
「これで訳せるかどうか、加工してみないと分からないんですよね？」
ジークは言った。女性はあごに手をあてる。
「そうね。でもこの石は世界で一番魔力の強い石だから、これで訳せなかったらもう無理ね。これは割とランクの高いものだし」
「でも最高ランクではないんですよね？」
「そうよ。最高ランクにまでなったら、国が一つ買えるわ」
ジークは俺の方を見る。俺は口を開く。
「ちなみに、これはおいくらですか」
女性は微笑みながら、俺とジークの一生分の稼ぎを足したらようやく足りるかもしれない金額を言った。俺はジークを見た。目と目で通じ合ってしまった。絶対に買えない。

「お金が足りないのかしら？」
「そうですね。絶望的に」
ジークが言った。
「この子が外国人なの？」
女性はアイネを見る。
「そんなに強い石でないと、駄目なの？」
「百貨店で一番強いやつでも駄目だったんで、なるべく強い方がいいと思って」
「市販のもので通じないなんて、一体どこの子なの？」
教えるべきではない。ジークもそう思ったのだろう。口を開かない。
「トゥーシャ？」
女性は言った。俺は女性の目を見てしまった。女性は目を丸くする。
「あら、当たったの？　本当に？」
しまった。自分の反応の素直さを呪った。
「そうよね。今時訳せないなんて、誰も知らないような国か、トゥーシャくらいだものね」
女性は微笑んでいる。
「本当にトゥーシャなの？　昔の呪文が使えるの？　見たいわ」
今ならまだ知らばっくれることができる。横目でジークを見る。
ジークは、息を吐いた。
「いいよ、もう自棄だ。アイネ、古代呪文見せて」「ジーク」
アイネはジークを見たが、多分通じていない。ジークは取り消すつもりはないらしい。俺も自棄に付き合うしかなさそうだ。
「じゃあ、シュアレクが見たい」
俺は自分が見たい呪文を言った。「アイネ、シュアレクやって」
アイネは女性を見てから、腹の前で手を組んで、目を閉じた。
『緑の地　自　土　風　水　気　露の香り浴びて甘く』
アイネの手が緑色に光る。アイネは目を開く。瞳の色と、同じ色

だ。
『以ってこの地に舞い踊れ』
アイネは手を解いて、すくっていた水をこぼすように手を離した。
『シュアレク』
床に光が広がる。草が生えていく。壁にはつるが這い、花が咲く。
店の中が緑に埋めつくされる。
アイネは床に向けて手を振った。緑が消えて、女性の拍手の音で我に返った。
「すごいわ」
確かにすごい。現代人が使える呪文とは格が違う。
「まさか本当にトゥーシャの呪文が見られるなんて思わなかった。ありがとう」
女性の頬は紅潮していた。
「あなた達、この石が必要なのよね？」
女性はトレイの上の赤い宝石を指差した。俺とジークの一生分の給料と同じ価値がある、あれだ。俺達は頷く。
「お礼といっては何だけれど、これを、あげるわ」
「本当ですか」
ジークがカウンターへ身を乗り出す。
「ただし、質問に答えられたら」
女性は唇に指をあてて、トレイをジークから離す。
「この世界でみんなが幸せに生きていくために必要なのは何かしら」
「お金」
ジークは即答した。
「お金で幸せは買えるけれど、そういう意味の質問じゃないの」
俺は形式的な言葉を口にする。
「愛？」
神学校で誰でも教わるフレーズだ。『すべての人を愛しなさい』。
女性は笑う。
「そうね。みんながみんなを愛せば、幸せになれるわ。世界を変え

るのは愛よ」
ジークは納得がいかなそうな顔をしている。
「いつかきっと分かる時が来るわ」
女性はトレイを持って店の奥へ歩いていく。
「正解なんですか？」
俺は尋ねた。女性は微笑んだ。
「加工してくるから、少々お待ちなさいな」
そう言って奥へ消えていった。俺はアイネを見た。エメラルドの瞳がこちらを見る。
アイネが言葉を分かっていたら、絶滅してしまったトゥーシャは、今の質問に果たして何と答えたのだろうか。

女性がトレイを持って戻ってきた。トレイの上には赤い宝石がはまった、羽の形に似た金色の飾りが置かれていた。
「つけてみて。左耳にね」
女性が手袋をした手で飾りをアイネに渡す。アイネは飾りを受け取る。アイネの左耳の上に、飾りが収まる。
「言葉、分かる？」
俺は尋ねた。アイネが俺を見る。アイネは眉を寄せて、左耳を押さえる。「何か喋ってみて」ジークがジェスチャーする。
『雑音が酷い』
アイネの声に聞き取れないくらいのノイズがかかっている。女性は頬に手をあてる。
「それで駄目なら、もう駄目ね」
やはり駄目なのだろうか。現代の技術では、古代人と会話することもできないのか？
アイネは左耳から飾りを外す。白い細い指で、赤い宝石を撫でる。アイネの指先が、水面に石を落とした時のように光る。アイネは飾りを左耳につける。
「これで、聞こえる？」

俺はアイネの目を見る。アイネは眉をひそめる。
「まだ駄目？」
俺は思い切り首を横に振る。女性はため息をついた。多分、感嘆のだ。
「何をしたの？」
女性がアイネに尋ねる。「石に魔力を、ちょっと」アイネの答えは歯切れが悪い。トゥーシャの秘密なのだろうか。
「本当にトゥーシャなのね」
女性は真剣な顔をしていた。
「俺の言葉も分かるの？」
ジークがアイネの側に寄ってくる。アイネは頷く。
「名前、通じてた？」
「さすがにそれくらいは」
ジークは自分を指差す。「ジーク」アイネは言う。ジークは俺を指差す。「レオン」エメラルドの瞳が俺を見上げている。
「ほら、レオンも何か言えよ」
いきなり言えと言われても、困る。
「まあいいや。無事通じたことだし、帰ろう。立ち話もなんだし」
ジークは意外にもあっさり引き下がった。俺は、すごく気になっていることを女性に尋ねる。
「あの、お金は」
「あげるわ」
女性は微笑んだ。
「後から取り返しに来たりしませんか」
ジークが尋ねる。なにしろ二人の給料一生分だ。それなのにただなんて、ただより高い物はない。
「取り返したって、そんな強い翻訳機誰も使わないもの」
そういう問題ではない。俺はジークを見る。ジークも俺を見ていた。
「いいの。それはトゥーシャに会えて呪文を見せてもらったお礼。

本物のトゥーシャにはそれ以上の価値があるわ」
「じゃあ、もう返してって言っても返しませんからね」
ジークが言う。女性は笑い声を抑えて「どうぞ」と言った。三人で女性に頭を下げた。女性は、笑顔で手を振って見送ってくれた。
「また会いにきてね」
女性がそう言ったように聞こえたが、遠くて返事はできなかった。

紅茶を飲んだジークを、アイネは紅茶のカップを握りしめながら見ている。ジークは気付いて、アイネを見る。
「あ、毒見しないと駄目だっけ」
「もういい。この後何も起こらなければ大丈夫だから」
俺はミルクティーを飲んだ。かぎ慣れた香りは、落ち着く。今度は机に加えて、サイドテーブルもある宿屋なので、三人で円くなってちゃんとお茶を飲める。
「トゥーシャはみんなそうなの？」
俺は言った。
「いつもはこんなことしないけど、知らないところだから」
「じゃあ、改めて色々聞いてもいいかな」
ジークは言う。俺もジークも、紅茶のカップをサイドテーブルに置く。アイネも、一口も飲んでいない紅茶をサイドテーブルに戻す。
「ここに来る前、どこにいたの？」
「それは私が聞きたい。ここはどこなの？」
「それは後で答えるよ。アイネのことが先だ」
アイネは口を閉じる。不満そうだったが、口を開いた。
「村にいた」
「トゥーシャはたくさんいたの？」
アイネは頷く。「というか、トゥーシャしかいないのか」ジークは独り言のように訂正する。
「で、何があってここに？」
「石碑の前にいて、突然光に包まれて、気付いたらここに」

「石碑って何の？」
俺は尋ねた。アイネは目を伏せる。
「カタリナ様の」
「カタリナって、創造主の？」
アイネは頷く。
「何してたの？」
「別に何も。そこからの眺めが好きだから」
「アイネのいた場所は、何年だった？」
「一〇十四年」
少しだけ嫌な予感がした。一〇十四年はトゥーシャが絶滅した年だ。
「今は、何年？」
アイネが尋ねる。俺は口を開く。
「六二〇〇九年」
アイネは目を丸くして、それから伏せた。アイネの中でも、何かが繋がったようだった。

その昔、創造主カタリナは世界を創った。カタリナに創られたトゥーシャは、カタリナと共に暮らしていた。それが一年のことだ。
五八七年、カタリナの統治に不満があったトゥーシャ達はカタリナに全面戦争をしかけたが、カタリナが圧勝し、トゥーシャは絶滅の危機に追いこまれた。
五九七年、生き残ったトゥーシャ達は一斉蜂起し、とうとうカタリナから実体を奪った。さすがのトゥーシャも創造主を殺す力はなく、実体を奪うのが精一杯だったというのが現代の見解だ。実体を奪われたカタリナは、誰かの肉体を寄り代にしなければ世界へ干渉することができなくなった。
そして一〇十四年、一人のトゥーシャがカタリナを召喚し、カタリナによってトゥーシャは絶滅させられた。寄り代の肉体が死亡した後、六万年間カタリナは召喚されていない。

「アイネは一〇十四年から来たってことでいいのか？」
ジークが言った。
「そうなるんじゃないか」
ジークは眉を寄せて、腕を組む。
「どうやって？」
俺はアイネを見た。
「カタリナを、呼んだの？」
アイネは俺を睨んだ。
「呼んでない。どうしてそんなことしなくちゃいけないの」
意外だった。アイネがカタリナを召喚したと思っていたからだ。
確かに考えてみれば、アイネがカタリナを召喚したとしても、六万年後に飛ばされる理由が分からない。
アイネは机の上のカップを取って、紅茶を飲んだ。カップを戻す。
「そろそろ聞いてもいい？」
アイネは言った。手詰まりになってしまったので、俺は頷いた。
ジークも頷く。
「ここは未来でいいのね？」
「多分」
俺は言った。「多分って、何？」アイネが眉をひそめる。
「本当にアイネが昔から来たのか、まだ信じられない」
「私だってここが未来かなんて信じられない。とりあえず一〇十四年からの出来事を教えて。全部」
俺は一〇十四年にトゥーシャが絶滅したこと、その数万年後に今の人種が誕生し、カタリナは一〇十四年以降、一度も召喚されていないことを話した。トゥーシャが絶滅したと言っても、アイネは表情を変えなかった。
「だから聞いたのね」
「何を？」
「カタリナ様を呼んだかどうか。でも呼んでいたとしても、ここへ来た理由が分からない」

それは先程、思った。「でも呼んでないからね」アイネは念を押した。
「じゃあこの時代から誰かがアイネを呼び寄せた、とか」
「誰が？」
ジークが言った。まったくもっともな質問だ。
「それは分からない」
「そりゃそうだ」
静かになった。ジークのうなり声だけ聞こえる。
「分かった。視点を変えよう」
ジークはアイネに向き直る。
「歳いくつ？」
アイネいぶかしそうな目でジークを見る。
「十九だけど」
「趣味は？」
「それ、お前が聞きたいだけじゃないのか」
思わず遮ってしまった。
「どこから何が発展するか分からないだろ。レオンも聞きたいこと聞けよ」
それなら、なぜ胸を潰していたのかずっと気になっているのだが、そんなことは聞けない。聞いたら多分、殺される。
「カタリナはどうやって召喚するの？」
俺はアイネに尋ねた。
「呪文がある。でも、絶対に口に出しては駄目」
「それは現代人でも使えるの？」
アイネは首をかしげる。「どういうこと？」ジークが思い出したように手を打つ。
「現代人はトゥーシャより魔力が低いんだよ。レオン、説明してないだろ」
そう言われてみればそうかもしれない。
「現代人は魔法が使える人の方が少ないよ。使えても、発動文が一

つのものしか使えない」
ジークが言う。
「本当に使えないの？」
「少なくとも俺とレオンは現代呪文しか使えない。現代呪文って、発動文が一つしかないやつね」
アイネは頷いた。
「そういえば大司教に追われる心当たりは？」
俺は言った。アイネは首をかしげる。
「大司教って誰？」
「あのおじいさん」「ああ」アイネは頷く。
「あの人は何だったの？」
「よく分からないけど、アイネを連れて行きたいみたいだった」
「どこに？」
「それは知らない」
「ああ、そっか。大司教に聞いてみればよかったな」
ジークが言った。
「そう簡単に教えてくれないと思うけど」
「でも大司教ってことは、大分上層部が絡んでるってことだろ」
確かに大司教の独断か、大司教より上からの要請があったか、だろう。
「大司教か、大司教より上の誰かがアイネを過去から連れてこようとしたけど、失敗してあそこにアイネを飛ばしてしまった、とか」
俺は言った。でも、なぜアイネを現代に呼び寄せたのかは説明がつかない。
「それにしても、現代の技術で過去から人を転送できるようになったってことだよな？」
仮定を真実とするなら、そうなる。俺は頷いた。「進歩したな」
ジークは呟いた。
「アイネ、心当たりないの？」
俺は言った。

「何の？」
「現代に飛ばされてきた理由」
アイネは俺を睨んだ。
「ない」
どうやら思った以上にアイネは被害者だったようだ。俺は息を吐いて、サイドテーブルの上のすっかり冷めた紅茶を飲んだ。
「じゃあ、これからアイネを過去に送り返す方法を探すか」「レオン」
ジークが俺の言葉を遮る。
「戻ったらトゥーシャはすぐ絶滅するんだぞ。いいのか？」
ジークは俺とアイネを交互に見る。
「それが歴史なら」
アイネは目を伏せて、抑揚のない声で言った。
「分かってるんだろ？」
俺は言った。ジークは目を伏せる。
「分かってるけど、さ」
俺だって、何も感じていない訳では、ない。誰も喋らない。俺は覚悟を決めた。
「アイネ、一つ聞いていい？」
アイネがこちらを見る。
「何で胸潰してたの？」
変な間があった。アイネの頬が赤く染まっていく。手の平が向けられる。
「変態」
呪文代わりの怒声の後、俺はものすごい水流に飲み込まれた。
アイネは胸がないという訳ではなくて、むしろ大きい。死を覚悟してまで聞いたのは、場の空気を一掃するための俺なりの配慮だ。断じて聞きたかったからではない。
気付くと部屋の端に椅子ごと流されていた。一瞬、意識が飛んだらしい。水は跡形もなく、服も濡れていない。さすがに手加減して

くれたようで、ちゃんと生きている。ジークがこちらにやってくる。
「胸潰してたって何？　初耳なんだけど」
アイネがこちらに手を向ける。
「ジーク、後ろ後ろ」
ジークは振り返って、一瞬固まって、椅子の方に戻っていく。
「レオンの変態。よく分かんないけど」
ジークが口の横に手を当てて言う。
「違う。雰囲気を変えようと思ったの」
「もう少しましな質問はないの？」
アイネがこちらを見ている。その目は、服屋でジークに手を向けた時と同じで、とても、とっても冷たかった。「ごめんなさい」俺は小さな声で謝った。
「まあその勇気は賞賛するよ。よく分かんないけど」
アイネが横目でジークを見る。ジークは震え上がる。
「じゃあ無事雰囲気が変わったところで、明日からどうしようか」
ジークは言った。全然無事ではないのだが、俺は椅子を持ってサイドテーブルの側まで戻る。椅子が壊れなくてよかった。壊したら弁償だ。
「両親に会いに行きたい」
俺は椅子に座り直して言った。
「何？　里帰り？　ああ、アイネを両親に紹介するのか」
「違う」
俺が叫ぶのと、アイネがジークに手を向けるのは同時だった。
「いや、冗談です」
アイネは手を下ろす。ジークをすごく睨んでいる。
「色々顔が広い人達だから、何か知ってるかもしれない」
「じゃあ行こう。今のところ手がかりはないし」
アイネと目が合った。
「下心はないから。本当に」
若干嘘だが、これ以上心身共に傷を増やしたくないので言わない。

「そのフォローいらない」

墓穴を掘ってしまった。アイネの視線がとても、とっても痛かった。

3

3

「レオン、アイネ起こしてきて」
着替え終わって、鳥のさえずりを聞きながら日光浴をしているところに、ジークが言った。アイネは隣の一人部屋だが、まだ姿を見ていない。
「嫌だ。殺されそうだ」
勝手に部屋に入ったら、それこそ何が起きるか分からない。
「殺されはしないよ。負傷したら治してもらえるよ」
「嫌だ。ジーク行けよ」
「俺は負傷したくない」
話し合いでは一生決着がつかないので、じゃんけんで決めることにした。
「じゃんけん」
これで今後の運命が決まると言っても過言ではない。
「ぽん」
ジークはチョキ、俺はパーだった。目の前が暗くなる。体の力が抜けていく。
「行ってこいレオン。骨は拾ってやるよ」
ジークが俺の肩を叩いて、鍵を渡す。というか、普通女の子の部屋だったらみんな行きたがるはずなのに、この違いは何なのだろうか。生死がかかっているか、いないかか？
俺は腹を決めてアイネがいる部屋の扉をノックした。返事はない。思いきりノックした。返事はない。そもそもノック程度で起きるくらいなら、既に起きてこちらの部屋まで来ているはずだという結論に達した。それでも諦めずノックしたら、隣の部屋からジークが顔を出した。

「レオン、うるさい」
「畜生、安全圏にいるからって勝手なこと言いやがって」
「いや、うるさいのは本当だから」
俺は鍵を使って地獄の扉を開けた。部屋の中はカーテンが引かれていて薄暗かった。恐る恐るベッドに近付くと、アイネの横顔が見えた。完全に寝ている。俺は扉の隣の壁際まで戻った。
「アイネ、朝だよ」
反応がない。名前を呼んでみたが、まったく動かない。揺り起こさないと駄目なのか？　それだけは避けたい。けれど呼び続けても反応がない。生きているのか少し不安になってきた。
手を伸ばして、なるべく遠くからアイネの肩を叩いた。アイネの後ろ頭が動く。アイネはあっさりと、こちらを振り返った。薄く開いたエメラルドの瞳が俺を見ている。
「お、はよう」
アイネは上体を起こした。俺は身構えた。けれど、手を向けられる気配がない。
「飛ばさない、の？」
てっきり昨日のように飛ばされると思っていたので、意外だった。アイネは俺などいないかのようにベッドに腰かけて、左耳に翻訳機をつけた。長いスカートを柔らかく揺らして、カーテンを開けた。光が満ちる。目を細めると、アイネの白いネグリジェの輪郭が光に溶けた。アイネが俺の前に来る。
「布を巻いてたのは、父が男の子が欲しかったからっていうのと、動く時に邪魔だから」
何のことか分からなかった。昨日の質問の答えだと、数秒たって気付いた。
「あ、いや、ごめん、本当に」
まさか本当に答えてくれるとは思っていなかった。しかも真面目に。逆にこっちが恥ずかしい。アイネは真っ直ぐ俺を見ている。
「レオンとジークに助けられてよかった」

アイネは下を向いて、顔を上げる。
「ありがとう」
俺は、アイネの穏やかな表情を、初めて見た。

無傷だった俺を見て、ジークは質問を浴びせかけたが、時間だからと馬車に乗りこませた。紳士淑女が乗る馬車ではないので、車輪がとてもうるさい。
「何で無傷なの？」
「アイネが怒らなかったから」
「何で？」
「それは俺が聞きたい」
アイネは端の席で窓枠に頬杖をついている。どうやら聞こえていないようだ。ジークが真ん中、俺とアイネが端の三人横並びだ。
「ちゅーしたの？」
反射的にジークの頭をはたいていた。
「何でそうなるんだ」
叫んでしまった。アイネを見たが、聞こえていないようだ。よかった。
「つまんないの。せっかくだから何かしてくればよかったのに」
「そういう問題じゃないだろ」
「好きなんだろ」
いくら聞こえていないとはいえ、本人の前でそういう話をするのはどうなのか。
馬車が揺れた。アイネがジークの肩に倒れてきた。帽子が落ちる。アイネは動かない。
「寝てる」
ジークが言った。よくこんな酷い環境の中で寝れるものだと、嫌味ではなく素直に感心した。
「疲れてるのかな」
俺は帽子を拾った。

「レオン、こっちの席にすればよかったな」
「そういうのはもういいから」
窓の外を見ると、景色は完全に田舎になっていた。緑、緑、緑、川、田園、また緑。今日もいい天気だ。窓には硝子がはまっていない。風通しが最高にいいので、冬は乗れないだろう。暖められた草の香りをかぐと、懐かしい気持ちになる。同じような形をした白い家が何軒も見えてくる。馬車が止まると、車内も盛大に揺れる。
「アイネ、着いたよ」
ジークは言ったが、アイネは起きない。
「叩かないと駄目かも」
ジークがアイネの肩を叩くと、アイネはあっさりと目を開けた。声では起きないらしい。俺はアイネに帽子を渡した。アイネは寝起きには見えない動きで、帽子をかぶって馬車を降りた。
「レオン、家どこ？」
ジークが言う。思い出に浸らせてもらえない。
白い家の連なりの向かいに、道をはさんで黄色い花畑がある。花の上を白い蝶が何羽も飛んでいる。変わっていない。
白い家のうち一軒の扉をノックする。何も連絡しないで来たので、もしかしたらいないかもしれない。と思ったら扉が勢いよく開いた。
黒髪の、髪の毛がくるくるにカールした、小柄な女性がいた。女性は目を丸くして、俺を見た。
「レオンちゃん？　お帰りなさい」
笑顔が咲くとは、きっとこういう表情なのだろうと、俺は女性を見て思った。
「ただいま」「レオンちゃん」ジークが後ろから小声で呟く。「そこは流せ」
「色々あって友達を連れてきたから、上がってもいいかな」
「ジーク・フォンフィリアです」
ジークは女性の前に出てきて握手した。アイネも前に出てくる。女性の目が、明らかに輝いている。まずい。

「アイネ・リルンです」
アイネはぎこちなく女性と握手する。
「レオンちゃんのお嫁さんなの？」
「違います」「違う」
俺もちゃんと否定したが、アイネのまったく感情のこもっていない声に、少し傷付いた。
「母さんもちゃんと挨拶して」
女性、もとい母は元気よく返事をする。
「申し遅れました。シンシア・マグダラスです」
ジークが俺を見て小声で言う。
「若くない？」「前髪があるからじゃないのか」
ジークの質問を適当に流し、家へ上がる。
「父さんは？」
「畑に行ってるけど、すぐ戻ってくるわよ」
母は台所でお茶の準備を始めている。
「やるよ。座ってていいよ」
「レオンちゃんお客様なのに。でも久しぶりにレオンちゃんの紅茶が飲みたいから、お願いしちゃおうかな」
居間では、母に、ジークとアイネが向かい合って座るという変な場ができあがった。
「二人共、レオンちゃんのお友達なの？」
「俺は学校の寮の同室で、友達です」
母はアイネを見る。目が輝いている。
「私は、知り合い？　です」
今、『知り合い』の部分が疑問形だったぞ。確かに友達ではないが。
「学校は男の子しかいないわよね？　どうやって知り合ったの？」
母が台所の俺に聞いてくる。
「父さんが来てから話すよ。聞きたいこともあるし」
「先に話してくれたっていいじゃない」

母は頬を膨らませる。
「二回話すと面倒臭いだろ」
「何でも面倒臭がってると、すぐにおじいさんになっちゃうわよ」
「はいはい」
「はいは一回でいいの」
俺は笑ってしまった。
「何で笑うのよう」
「何でもないよ」
「レオンちゃんはすぐそうやって秘密にするんだから」
紅茶のポットと、カップとソーサーを人数分プラス一、ミルクポットと砂糖瓶をトレイに乗せて、居間に持っていく。玄関で声がした。母が立ち上がる。
「お帰りなさい」
居間に、黒髪で丸い眼鏡をかけた男性が入ってくる。俺を見ると、男性は微笑んだ。
「お帰り、レオン」「ただいま」
男性が俺の側に来る。
「大きくなったね。背が」
確かに身長は伸びたと思うが、どう反応すればいいのか、困る。
「レオンちゃんが困ってますよ」
父は笑った。
「ごめんごめん。こちらはお友達かな」
俺は頷く。ジークは立ち上がって、自己紹介をして父と握手する。アイネもぎこちなく名前を言って、握手する。
「レオンのお嫁さんかな？」
「違います」「違う」
アイネの言葉が胸に刺さる。嘘でもいいから、少しくらいむきになってくれたりしてもいいのに。
「トニー・マグダラスです」
父は母の隣に座った。俺はジークの隣に座って、全員分の紅茶を

注いだ。
「突然どうしたの？　ホームシック？」
「ホームシックではない。ちょっと聞きたいことがあって」
俺は順を追って、アイネをかくまったこと、アイネがトゥーシャだということ、追われていること、アイネを過去に送り返したいということを話した。
「古代呪文、見たい見たい」
案の定、母は目を輝かせて言った。
「アイネは見世物じゃないんだぞ」
「でもレオンちゃんはもうたくさん見てるんでしょ。ずるい」
「ずるいとかそういう問題じゃない」
「呪文くらいだったら」
アイネは言った。「本当に？」母はアイネを見つめる。アイネは頷く。
「やったあ。ほら、レオンちゃん、諦めなければ夢は叶うのよ」
意味が分からない。
「何がいいですか？」
アイネが尋ねる。
「私、呪文の名前分からないの。でも、一番綺麗なやつが見たいわ」
アイネは水をすくうように、胸の前で手を合わせる。ラルベルク（天体呪文／星）だろうか。
『白の空　月　宙　塵　光』
アイネの手元が黒に包まれる。
『陽の面影纏いて淡く　以って頭に降り注げ』
アイネは両手を上へ離す。黒が、溢れる。
『レリーナ』
居間は黒に包まれて暗闇になる。天井に、白い満月が浮かび上がった。本物のように、模様と、淡い光に包まれている。アイネが天井へ手を振ると、暗闇と月は消えた。母は、机の上のアイネの両手を握って、振った。

「ありがとう。すごい、すごいのね」
頬を紅潮させて話す母は、少女のようだ。アイネは母に手を振られたまま、目を伏せて頬を赤くしている。褒められるのに慣れていないのだろうか。父が母の手をアイネからはがす。
「それで、何を聞きたいの？」
父は言った。
「アイネを過去に送り返す方法」
「それは、ちょっと私達でも難しいよ」
「何でもいいんだ。最近の軍の動きとか。知ってることを教えてくれ」
「レオンは軍がアイネさんを転送してきたと考えてるの？」
「初耳だな」
ジークが言う。思い出したのだ。
「何のために？」
父が、俺に問う。
「軍事兵器として戦争に投入するために」
父は頬杖をついて、机に視線を落とした。
「可能性としてはあるかもしれないね。でも残念ながらそういう場所の情報は持っていないよ」
「ハインは？」
「ハインちゃんは、帰ってきてないわ」
「ハインさんって、どちら様？」
ジークが言う。
「兄で、軍人」
俺は言った。父も母も口を開かない。限界か。
「ハインを探すよ」
「役に立てなくてごめんね」
「でも、開戦するのは私達から見ても確実よ」
父の言葉に母が重ねる。
「お二人は何のお仕事を？」

ジークが言う。そういえば何の説明もせずに話を進めてしまった。
「国際ボランティア団体で働いてるよ」
「面倒だからついでに全部話すよ」
母が心配そうな顔で、俺を見ている。
「二人は里親で、休戦した時に仕事を通じて俺達を引き取ってくれた」
丁度、十年前だ。玄関でのジークの疑問は、これで解決しただろう。
「ハインはもう大人だったから、軍に入隊した。俺は学校に行かせてもらって、神官になることにした」
話してみると、意外と短かった。こんなものなのかもしれない。誰も何も言わなかった。
「今日は泊まっていくのよね？」
母が言った。「二人がよければ」俺はジークとアイネを見た。二人は頷いた。
「じゃあご馳走を作るわね」
母が立ち上がる。
「早くない？」
「レオンちゃんはそうやってのんびりしてるから、お嫁さんが見つからないのよう」
「それは言いすぎだと思うよ」
母の言葉に俺は深く傷付いた。母は台所に走っていった。
「お父さんの作った野菜、とっても美味しいんだから」
早速エプロンをしている。まだ昼なのに。
「ハインの居場所の当てはあるの？」
父が言う。
「本部にいるんじゃないのか？」
「開戦間近だから、別のところにいるかもしれないよ」
「本当に行くのか？　アイネを渡しに行くようなもんじゃないか」
ジークが言う。

「他に突破口が浮かばないんだ」
「そもそも軍がアイネを呼んだのかどうかも分からないだろ」
「だから本部に行く時は、俺一人で行くよ」
ジークは口をつぐむ。人を過去に送り返す方法なんて、誰も分からないのだ。
「ありがとう」
小さな声でアイネが言った。言葉を続けるのかと思ったが、アイネは黙っている。
「何が？」
俺は聞いた。
「二人に言いたかっただけ」
ジークが大きく息を吐く。
「分かったよ。最後まで付き合う」
「別に無理して付き合ってくれなくてもいいぞ」
「レオンとアイネがくっつくまで見守るよ」
アイネはジークを見る。睨んでいる。ジークは知らばっくれているのか、あらぬ方向へ目をそらしている。
「三角関係ではないんだ」
父が言った。
「俺はもう心に決めた人がいるんです」
ジークが親指を立てて言う。初耳だ。
「ジーク、お前、いつの間に」
「という訳で、レオン頑張れ」「頑張って」
ジークと父が言った。母が台所から大きな皿を持ってくる。
「はい、畑の野菜のバター炒めですよ」
居間の机に野菜炒めの皿が置かれる。
「母さん、早い。まだ昼だぞ」
「いいじゃない、お昼ご飯にすれば。他はもう少し時間のかかる物を作るから、そのうち夜になってるわ」
居間に座った人達は、強制的に野菜炒めを食べさせられた。でも、

美味かった。玉ねぎ、キャベツ、にんじんの甘みを塩が引き立て、バターの香りがそれをまとめる。
「美味い」
「でしょう？」
野菜を炒めて味付けしただけで、ここまで美味しいとは思わなかった。野菜炒めを甘く見ていた。
「もっと美味しいもの作るから、待っててね」
母は笑顔で台所に走っていった。

夕食は食べきれないくらいの肉と魚、スープにサラダに米が出た。父はワインをあけてくれた。アイネは気分が悪くなったらしく先に部屋に戻った。ワインが苦手だったのかもしれない。俺も居間を抜けた。今は父とジークが二人で語り合っている。
廊下は暗く、空気は冷たかった。昔使っていた部屋の扉を開ける。ここへ来てから食べっぱなし飲みっぱなしで忘れていたが、墓参りに、行かないと。
窓の外の黒い夜空に、円い月が浮かんでいる。ベッドにアイネの後ろ姿が座っている。後ろ姿が振り返る。暗がりで目が、合う。
「間違えた。ごめん」
正確には間違っていないのだが、母は俺の部屋をアイネにあてがうことにしたようだ。紛らわしい。
『待って』
出ていこうとして、アイネを振り返る。左耳には翻訳機がついていない。アイネは目を伏せた。
『何でもない』
言葉が分からない。けれど、この状態でアイネを放っておけるやつなどいるのだろうか。別に酔っているからとか、下心があるからという訳ではなく、アイネの目が赤いように見えたのだ。
俺は部屋に入った。扉は閉めなかった。椅子を引いてきて、ベッドの側に座った。

「ホームシック？」
アイネはこちらを見ない。そういえば通じないのだった。立ち上がって、窓を開けた。風が心地よい。
「アイネのところと、月は同じなの？」
俺は月を指差して言った。アイネが月を見上げると、下ろしたおかっぱの銀色の髪が揺れる。アイネはうつむいて目を伏せた。何も言わない。引き止められたように感じたのだが、自意識過剰だっただろうか。
「何かよく分からないから、戻るよ」
扉まで歩いていくと、アイネの声が聞こえて体を引っぱられた。振り返ると、アイネが服の背中をつかんでいた。どうすればいいのだ。
「アイネ、翻訳機」
俺は自分の左耳を叩いてみせた。アイネは下を向いている。もうどうにでもなれと思って、俺はアイネを思い切り抱きしめた。
アイネの体は温かくて、柔らかかった。神学校の庭で抱き上げた時、どうして気付かなかったのだろう。
耳元で、アイネがしゃくりあげるのが聞こえた。我に返ってアイネを離す。
「ごめん」
泣く程嫌がられるとは、ショックだ。けれどアイネは首を横に振って、俺の服をつかんで肩に額をつけた。俺はアイネの肩に手を置きかけたが、背中を叩いて、さすってやった。
目の前で泣いているアイネは、トゥーシャでもなく、感情を殺した女性でもなく、年相応の、一人の女の子だった。

頭を上げると、夜が明けそうだった。アイネは泣いた後、眠ってしまった。帰るタイミングを逃したので、そのままベッドの側にいたら意識が落ちたらしい。アイネの顔を見ると、穏やかだった。また叩かないと起きないのだろう。信用されているのか何なのか、こ

れはこれで複雑だ。
伸びをしたら体が痛かった。開けっ放しの扉から外に出て、庭へ向かった。
庭の真ん中に、石碑がある。俺は石碑の前に座りこむ。
「遅くなって、ごめん」
返事はない。
「ごめん」
昨夜のアイネの姿を思い出す。俺は今でもずっとここに座っている。ここから動ける日は、きっと来ない。
『ミリア』
石碑の文字を、目で追った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7154x/

ラヴィング

2011年10月20日08時31分発行